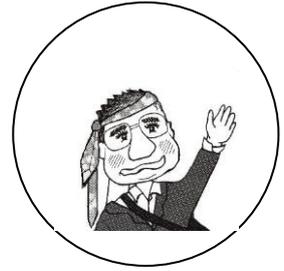


大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3 マツイ・ビル 201 TEL : 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail : daimao@travelmitra.jp)

多様性の中の第三の性

最近、多様性（ダイバーシティ）ということばをよく聞く。海外からの留学生・居住者がふえてきたせい、わがミトラ城近くに日本語学校があって、ベトナム人やネパール人の語学留学生が集まっているのをよく見かける。日本も多様性の時代が近づいてきた。多様性に不慣れな日本人が、どこまで寛容になれるかが問われることになる。

わが輩にとって、多様性といえばすぐに想起するのは「インド世界」である。風土・気候・宗教・民族・言語、あれほど混沌とした世界も珍しい。あの多様性を、「インド」としてまとめているものは一体何なのか。人口の80%をしめる「ヒンドゥー教」だという人もいる。ヒンドゥー教といっても宗教としてではなく、ヒンドゥー的「日常生活」と言ったほうが近いかもしれない。

インド世界を総体的とするなら、ヒンドゥー的日常生活は部分的（差異）となる。正しくは、総体＝部分が、混沌のインド世界といえる。この部分には、男と女の外見上の違いである差異、お金持ちと貧しい人との貧富の差、カースト制による差別などが含まれている。

この度、インドの第三の性ヒジュラ（ヒージュラー）の世界に触れてきた。ヒジュラとは、男性として生を受けたが、女性の心をもつ人たちのことである。両性具有と訳されている。

最初にヒジュラをみたのは初渡印の1971年であった。友人が「あれはヒジュラだ」と教えてくれた。通過する汽車のデッキに三名のヒジュラが見えた。サリーを纏っているが男性の顔付きであった。何かしらインドの文化に触れたような気分になった。

その後至るところでヒジュラに出会った。ボンベイでは商店主に銭を要求していた。デリーでは渋滞中の車間を縫うように渡り歩き右手を差し出してきた。ヒマラヤ山脈の町マナーリーでは集団のヒジュラにであった。ヒジュラも避暑にくるのか、と思った。彼らの服装は華やかで美しいヒジュラもいた。商店の軒先で歌い踊り店主が銭を恵んでくれるまで動こうとしなかった。営業妨害である。しぶしぶ店主が数百ルピーを渡したが、その額に不満なのか突き返した。店主が幾分か紙幣を足して渡すと次の商店に移動していった。紙幣は貫禄のあるおばさん風のボスに手渡された。周囲に人が集まり歌と踊りでエネルギー（性力）が充満した。

両性具有は、哲学的な意味をもつ。二元的宇宙生成原理としてプルシャ（男性原理・精神的原理）とブラクリティ（女性原理・物質的原理）がある。プルシャ（男）が〈観る〉とブラクリティ（女）

が開展するという原理である。比喻として、男性の観客が舞台を観ると、女性の踊り子が演舞し始めるといふものがある。〈観る〉ということに大事な哲学的な意味があるが、ここでは述べない。

男性が主役なのだが、女性の根源的性力なくして世界は現れない。この俺さまが給料を運んでくるが、スーパーで買い物をして食事を作るのは妻である。妻なくして家庭という世界は成り立たない。どっちが偉いのか。そこで半男半女という考えが生じてきた。

南インドの寺院でシヴァ男神と妻パールヴァティー女神が合体した像をよくみる。右半身は男で、左半身は女のアルダナーリー像（両性具有）である。

わが恩師小西正捷先生（文化人類学）によると、両性具有には「男でも女でもない両義的かつ境界的存在に、一種の畏怖をも込めた靈力を認める思考が存在した」と述べている。つまり、おぞましい存在なのだが、ひょっとしたら何者かが与えた靈力があるかもしれない人間ということである。それがヒジュラである。彼らは忌み嫌われることもあるが、子どもの誕生時や結婚式などに招かれることがある。呪性があるから、怒らせると危険だと思われる。彼らは個人では生きづらいため集団で生活している。師弟関係、疑制的親子関係で成り立っている。

2007年「ナヴァラサ」というインド映画があった。ナヴァは九、ラサはエッセンス、飲み物などの意味があるが、「感情の状態」のことである。主人公は男性だが、女性だと自認するようになる。もちろん父親はそのことを認めない。そこでクーヴァガムの寺院に詣でて女性として生きることを決意する。そのあとを姪シュエータ（13歳）が追いかけて、叔父の生き方を理解していくという物語である。この映画の特徴は、まだ幼い少女の眼をとおして描かれていることである。

さて、以上は映画だが舞台となったクーヴァガムのアラヴァーン寺院は実在する。われら探究巡礼団は農道をくねくねと走りやっとなどり着いた。旧知のF講師がかつて訪れたと聞いたが、二番目はわれらである。

主神は『マハーバーラタ』物語に登場する英雄アルジュナとナーガ蛇族の王女ウルーピーとの息子アラヴァーン（イラーヴァーン、イラーヴァット）である。アルジュナがガンジス河で沐浴していたとき、ウルーピーに河底に引き込まれ関係をもち生まれた子どもである。土着の蛇族との子なので神格としては低く、『マハーバーラタ』では全くの端役になる。神像は大きな目玉をもち、どうやら頭部だけのようである。面白いのは、祭司がスイッチを押すと大音量の太鼓と鐘が堂内に響き渡り、主神を揺らし始めた。頭部がブランコにのっていたのである。まるで遊園地の電気仕掛のようで驚いた。

わが輩の疑問を呈しておこう。わが輩の知る限りではヒジュラが詣でる寺院はインドに二ヶ所ある。これらの辺鄙な村が、なぜヒジュラの寺院となったのか、その理由は分からない。もしかしたら、ヒジュラの姐御がこの村の出身者なのかもしれない。それが伝播してインド中のヒジュラが集まってくるようになったのか、などと想像している。もう一つ、男性の心をもつ女性の集団はあるのか。あるなら何と呼ばれているのか知りたい。

日本では、3月14日札幌高裁で同性同士の婚姻を認める裁判の判決があった。男性と女性の異性愛者は結婚できるのに、女性と女性、男性と男性の同性愛者が結婚できないのは「合理性を欠く差別的な扱い」であるとの判決であった。「婚姻によって得られるさまざまなメリットが受けられていない」ことが主なる問題のようである。やがては「婚姻」という概念そのものがなくなる時代が到来するのかもしれない。そのときのメリットとは何だろうか。

ところで、アラヴァーン男神を信仰するヒジュラは、アラヴァーニー（女性名詞）と呼ばれる。かれらは第三の性として法的（2014）に認められているが、誰と結婚するのか。かれらはアラヴァーン寺院に詣でて男神と結婚するのである。物質的経済的なメリットはないが、神と一体になる至福だけが与えられる。